Kanon
カノン

雪が…静かに舞い始める

「雪が見たい」
　そんな、幼いころの願いをかなえるために、昔、祐一の両親は冬休みの間だけ、祐一を親戚の家に預けていた。
初めて見る雪。
　そして、初めて出会った従妹の少女。それから毎年毎年、雪の降る季節になると祐一は、この街へ帰ってきていた。
……従妹の少女と会うために。
　そんな冬の間だけの再会は、数年間に渡って繰り返されていた。しかし、ある年を境に、祐一はこの街を、雪の街を拒絶するようになったのだ。
　そしてそれ以来、祐一がこの街に来ることも、従妹の少女と連絡をとることもなくなっていった……。
──そして７年の歳月が流れ──
　祐一の目の前では雪が降っていた。
　重く曇った空から、真っ白な雪が音もなくゆらゆらと舞い降りていた。
　祐一は、両親の仕事の都合で、住み慣れた街を離れ、ひとり、数年ぶりに雪の降る街へと足を運んでいたのだ。
そんな祐一を出迎えるはずの人影は、約束の時間を２時間過ぎても現われることはなかった。ただ冷たく澄んだ空気と、湿った木のベンチが祐一の傍らにはある。白いため息を吐き出すと、視界が一瞬白いもやに覆われて、そしてすぐに北風に流されてゆく。祐一にとって、最初は物珍しかった雪も、今はただ鬱陶しいだけだった。そして再びため息まじりに空を見上げると、視界をゆっくりと何かが遮る。
「雪、積もってるよ」
　７年ぶりに交わされる会話にしては、どこかピントがズレているようだ。街頭の時計を見ると──、約束の時間を２時間は軽くオーバーしている。
「これ、あげる」
　そう言って差し出された缶コーヒーの暖かさが、冷え切った指に心地よい。７年ぶりの再会のお祝いと、２時間遅刻したお詫びの缶コーヒー１本。もう忘れてしまっていたとばかり思っていた７年前の記憶が、よみがえり始めるようだった。
「私の名前、まだ覚えてる？」
　彼女のしぐさ、表情、そしてひと言ひと言が、地面を覆う雪のように、確実に記憶の空白を埋めてゆく。
　こうして７年ぶりの街で──、
　７年ぶりの雪に囲まれて──、
　祐一の新しい生活が、冬の風にさらされて、ゆっくりと流れ始めていく。

冬のある日、思い出の街に降り立った主人公は──

"思い出の街"での新たな生活

こうして主人公の、雪の降る街での新しい生活が始まっていく。新しい街、懐かしい街。新しい生活、懐かしい人たち。ときには夕暮れの商店街で、ときには転校した学校の中で、ときには迷い込んだ公園で……。主人公はいくつかの新たな出会いと、いくつかの懐かしい顔との再会を、幾度となく繰り返していくことになる。

そんな主人公のことを待っているのは、不思議な雰囲気を持った先輩。ぱたぱたと背中の羽根を鳴らし走る少女。言葉を交わすことのない姉を持つ娘。主人公のことだけを覚えていた女の子。そして、昔と変わらぬ笑顔をたたえた従妹。彼女たちは主人公との出会いとドラマ、そしてまだ見ぬ新しい季節が来るのを待ち望んでいるぞ。

物語は、主人公の生活を中心にゆっくりと進んでいく。そこでは飾りのない、素顔の普通の日常生活が描かれているぞ。主人公が笑い、泣き、哀しむように、ヒロインたちも同じように、この作品の中で生きているのだ。

この作品は、コマンド選択式のオーソドックスな恋愛アドベンチャーゲームだぞ。選択肢の選び方によって、それから物語の展開が、そしてヒロインとなる女の子が変わっていくのだ。特徴としては、攻略といったことよりもストーリーの展開が重視された作品なので、選択肢からはひっかけ的なものが極力排除された作りとなっている。そして、この作品で主人公は、ストーリーの流れに沿って、ヒロインたちと出会い、そしてドラマを織りなしていくことになるのだ。

また、これから始まる各ヒロインたちの紹介は、普段、公表されることのないラフ原画も掲載しているぞ。実際のグラフィックになったものと見比べてみるといいかもね。思わぬ初期設定があったりして……。また、各キャラごとに描かれているエピソードは、シナリオ担当の麻枝氏と久弥氏の手によるもの。これが作品の中でどの部分に当たるのか、想像しながら、そして楽しみながら読んでみてね。

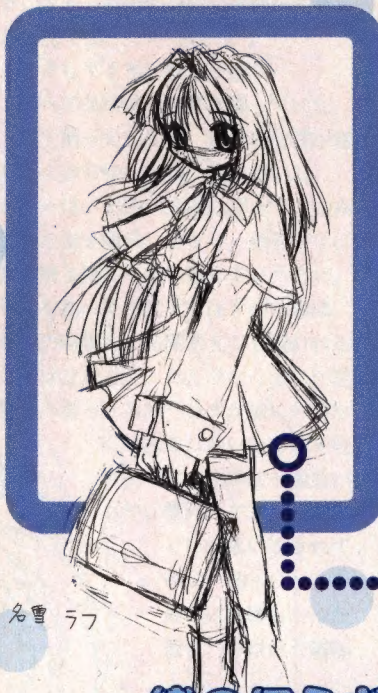
水瀬名雪

Nayuki Minase

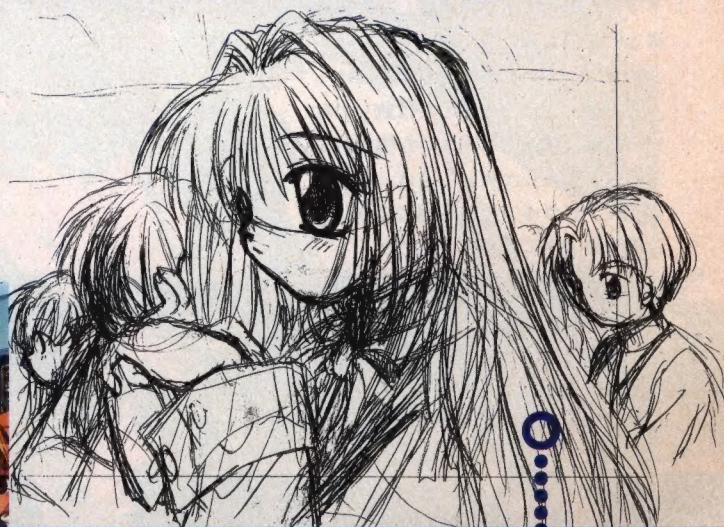
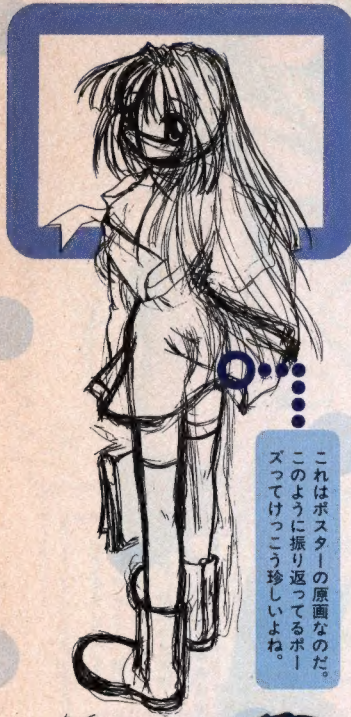
PERSONAL DATA
Birth：23th. December
Blood Type：B
Height：164cm
Weight：47kg
B・W・H：83・57・82
(cm)

名雪は、主人公が居候する水瀬家のひとり娘なのだ。主人公との関係は、従妹になる。ロングヘアーで、おとなしそうな顔立ちといった外見通り、少しおっとりとした優しい娘だぞ。

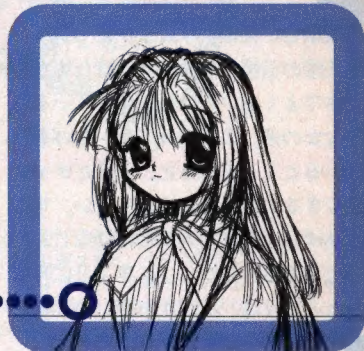
そんな名雪には少し天然ボケの気がある。そのため、主人公との会話では、主人公がボケたところに名雪がマイペースなボケで受け、結果、話が脱線してあさっての方角へと飛んでいってしまうこともしばしばなのである。

そんな名雪には、主人公が転校してきて、クラスメイトたちに同じ家に住むことを嬉しそうに宣伝しまくる、といったかわいい一面も持っているのだ。とはいえ、普通、年ごろの女の子だと、同じ屋根の下にクラスメイトの男の子が暮らしていることは秘密にしたがってもよさそうなものなのだが……。若干、ズレているのかもしれない。

名雪 ラフ

表情や顔のうつむき加減が違うせいか、原画と描かれたグラフィックを見比べると、頬のあたりは原画のほうがほっそりとしている印象を受ける。また、両手で学生鞄をしっかりと抱えている仕草は、いかにも年ごろの女の子的だね。

一緒のほうが、きっと楽しいよ

このふたつは、学校の教室での名雪の一連の動きなのだ。伏せていた視線が上を向いたのは、窓の外に何かを見つけたからかな。また、周囲の学生たちも原画通りに描かれている。

すやすやと眠っている名雪。彼女の側にいるかえる君のヌイグルミは、原画の段階から決まっていたんだね。原画には描かれてなかったパジャマの柄は、猫の肉球なのかな。

これはポスターの原画なのだ。このように振り返ってるポーズってけっこう珍しいよね。

この原画には、おっとりとした名雪の性格がうまく表わされているよね。

昨日と同じ朝

「名雪、今日も部活？」
　まだたっぷりと眠気の残っている頭を抱えながら、階段を下りきったわたしに、お母さんの穏やかな声が届く。
「うん。だから早く出ないと……」
　油断すると下がってくるまぶたをさすりながら、まだ眠気の残る頭と身体を懸命に動かし洗面所まで行く。
「でも、全然早くないわよ。もう」
　さっきと全く変わらない口調がドア越しの台所から聞こえてくる。
　その数秒後、「え？」と思わずうわずった声で問い返している自分の姿が、洗面台の鏡に映っていた。
「お母さん、今何時……？」
　その問いに返ってきた答えを聞いて、思わず歯磨き粉を強く握りしめる。
　びにょん、と必要以上に伸びた歯磨き粉の乗ったブラシを数秒間見つめた直後、わたしは歴代に残るような早さで身支度を整え、玄関へと移動した。
「部活、間に合いそう？」
「……たぶん無理」、すでに諦めていた。
「それと、あの話だけど……今日、名雪が迎えに行ってね」
　家族がひとり増える。お母さんは、昨日わたしにそう言った。
「どうして、わたしが……？」
「名雪も早く会いたいでしょ？　どきどきして食事も喉を通らないって」
「言ってないし、いくらでも通るよ」
　だいたい、この話をお母さんから聞かされたのは昨日の夕食後だった。
「１時に駅前だから、お願いね」
「……うん、いいけど」
　靴ひもを結わえながら仕方なくうなずく。どうやら、部活を遅刻したうえに早退しないといけないらしかった…。
「行って来ます」。鞄を持って、そのまま玄関を開いて外に出る。
　その背中を「行ってらっしゃい」、のやさしい声がぽんと押した。
　予報によると、昼過ぎからお天気は下り坂だった。だけど、見上げた空はどこまでも青くて。眩しくて……。
「約束の時間に遅れないように……」
　真新しい新雪に、残った足跡。
「１時に駅前……、１時に駅前……」
　同じ言葉を何度も反芻しながら、わたしの１日がゆっくりと動き出した。

月宮あゆ

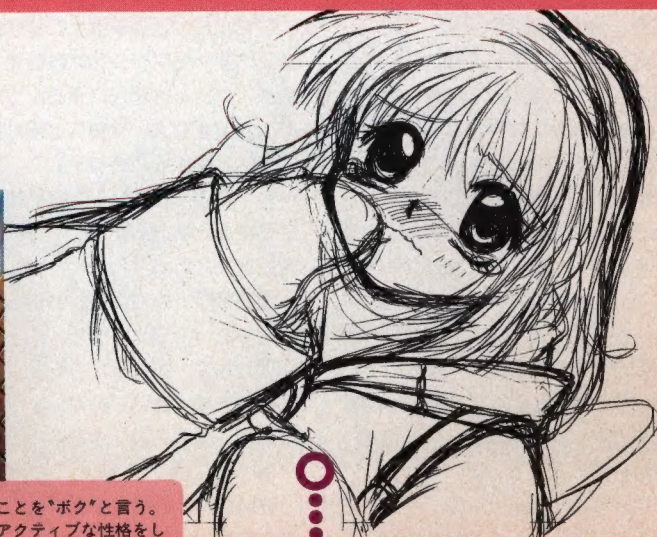
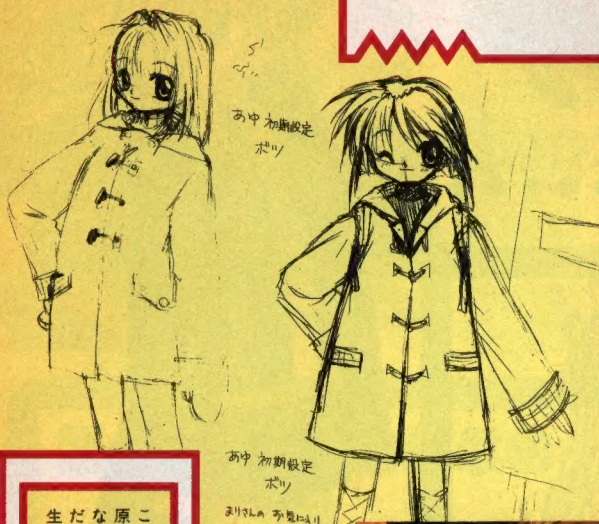
Ayu Tsukimiya

PERSONAL DATA

Birth：7th. January
Blood Type：AB
Height：154cm
Weight：41kg
B・W・H：80・52・79 (cm)

あゆといえば、リュックについている天使の羽根をパタパタとはためかせ、街中でよく追いかけっこをしている元気な女の子。二日続けて食い逃げをしているところを見ると、よほどチャレンジするのが好きな性格らしい。そんなあゆは、実は主人公とは幼なじみだったりする。しかし、7年ぶりに再会したふたりは、なぜかお互いのことを思い出せずにいたのだ。

そして、あゆはとても表情が豊かな女の子だぞ。思わぬ再会に、満面の笑みで微笑んでいたかと思えば、いきなり公園の木と熱烈な抱擁をかわしてしまい、鼻をさすりながら涙目で抗議したり。屋台のオヤジに追われ、緊迫した表情をしたりなどなど。このように彼女は、ともかく喜怒哀楽をストレートに表わしてしまう娘なのだ。こんな女の子なら、一緒にいても飽きないね。

右の写真にはないが、あゆのトレードマークといえば、背中にしょった天使の羽根付きのリュックなのだ。また、ちょっと意外な感じもするが、あゆは5人のヒロインたちの中で、最も身長が低いという設定である。あの栞よりも小柄だぞ。

あゆは自分のことを"ボク"と言う。これは彼女がアクティブな性格をしているためなのか。しかし、元気なのはかまわないが、前方不注意で毎度、ぶつかるのはどうかと思うぞ。

こちらはあゆのボツ原画。当初から元気な女の子という設定だったらしく、瞳が生き生きしているね。

“うぐぅ”というのが実はあゆの口グセ。どうも言葉に詰まると、ついつい口にしてしまうようだ。この調子だと、彼女の料理の腕前は、あまりアテにならないものなのかもしれないね。

たい焼き

夕焼け空が広がっていた。

編み目のように枝を張った大きな木に、赤く染まった天井がにじんでいた。

赤くて、ただ真っ赤で……。

静かで、耳鳴りが聞こえるくらい静かで……。そして、悲しくて……。

くぅ〜。

不意に、お腹が小さく鳴った。

気がつくと、青空が広がっていた。

まばらに散らばる雪雲の合間を、青い空が押しのけていた。

赤い煉瓦の道を行き交う人の流れ。

風景のあちこちに雪を残した街並み。

見覚えのある場所だと思った。立ち止まって、そして、お腹を押さえる…。

「うぐぅ……お腹すいたよ……」

家まではまだ距離があった。自然と足が商店街の奥へと歩いていく。

手袋をした手で背中のリュックを背負い直して、本屋さんと雑貨屋さんの角を右に曲がった。この先に、おいしいたい焼き屋さんがある。ボクにそう教えてくれたのは、たい焼きのたくさん入った、暖かい紙袋を手渡してくれたのは、誰だっただろう……？

たい焼きの屋台が見えると、ちょうど並んでいたお客さんが茶色の紙袋を抱えて通り過ぎていった。

すぐに、屋台の前に駆け寄る。

「たい焼きひとつくださいっ」

ふと思い返して、もう一度言い直す。

「いちばんおいしいのくださいっ」

どれもおいしいよ、と苦笑する屋台のおじさんに照れ笑いを返しながら、白い湯気を立ち上らせる鉄板をじーっと見つめる。おさかなの形をした鉄板の中で、茶色に色づく姿を想像しながら焼き上がりを待っていると、もう一度お腹が小さく鳴った。

「…えっと、やっぱりふたつください」

鉄板が開いて、中から焼きたての芳ばしい香りが真っ白に視界を埋め尽くした湯気に乗って広がっていく。

手渡された紙袋が暖かくて、嬉しくて、そして、どこか懐かしくて……。

いちばんおいしいのと、2番目においしいのだよ、とおじさんが笑う。

芳ばしい香りをお腹いっぱい吸い込みながら、辿る記憶の向こう側で……。

それは、もうすぐそこにあった。

沢渡真琴

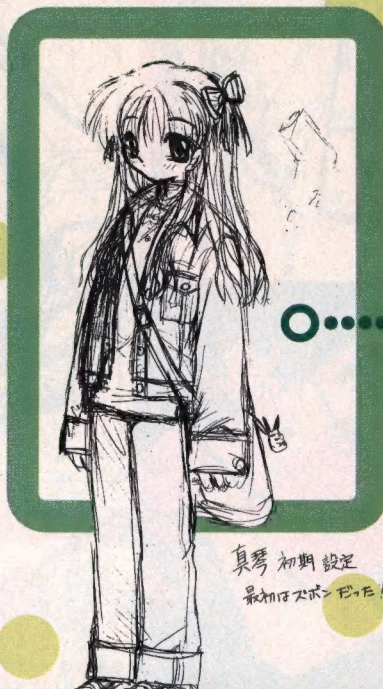
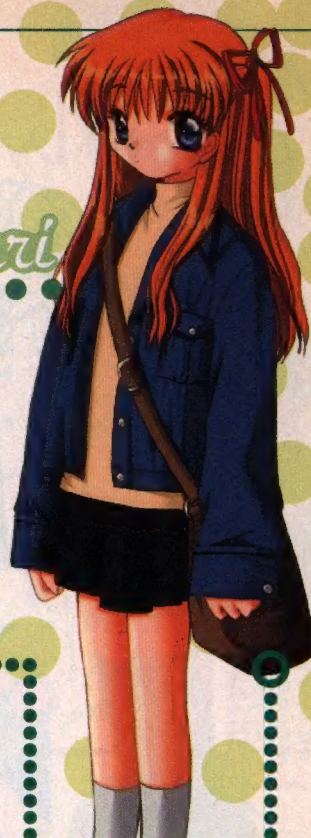
Makoto Sawatari

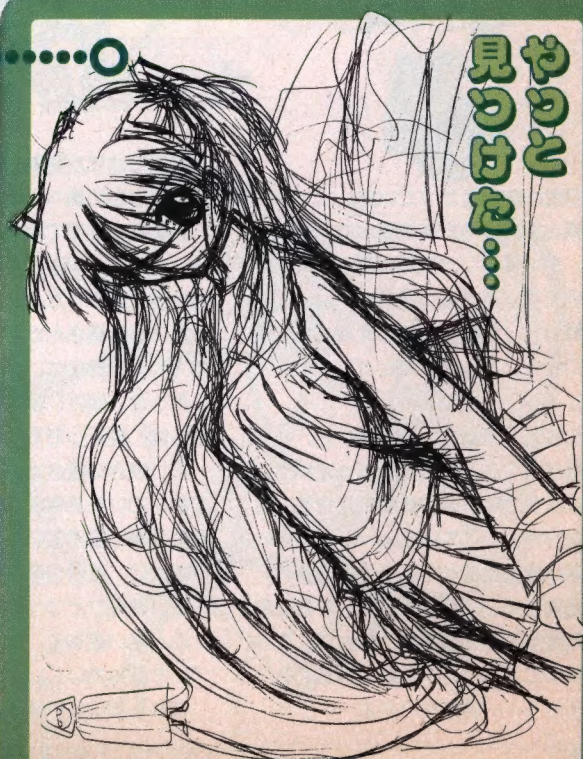
PERSONAL DATA

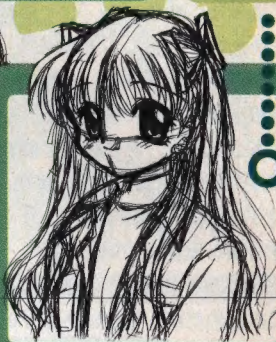
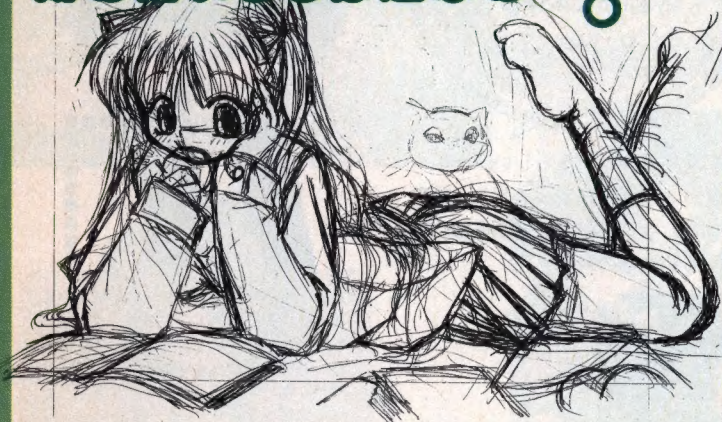
Birth：6th. January
Blood Type：Unknown
Height：159cm
Weight：46kg
B・W・H：81・55・79 （cm）

真琴は、記憶喪失の状態でゲームに登場してくる。そんな彼女の胸には、なぜかはわからないが、主人公をひと目見たときから、憎いという思いが込み上げてきたのだ。そして、話の成り行き上から、ついには主人公が居候している水瀬家に押しかけてきて、そのまま居ついてしまうことに。真琴も真琴なら、それを許してしまう水瀬家もどうかとは思うのだが……。

といった真琴だが、グラフィックを見る限り、彼女は設定のような厳しい雰囲気は持っていないね。どちらかというと、のんびりと今の状況を楽しんでいるといった感じすらある。

ところで真琴は、記憶喪失であるにも関わらず、なぜ自分の名前や誕生日がわかったのかな。おそらくその答えは、ゲームをプレーすることで解き明かされていくことになると思うぞ。

なんと真琴は、当初の設定ではジーンズ姿だったのだ。このままゲームに登場すれば、アダルトゲームのヒロインの服装としては、かなり思い切ったキャラになったのに、スカート姿に落ち着いたみたい。これは真琴の脚線美の勝利なのか。

どうやらこのシーンは、真琴が主人公のことを見つけたときの様子みたいだね。あごを引き気味にして、キッと見据えた視線を投げかけてくると、かなり迫力があるぞ。

名雪の家に押しかけてきて、すっかり馴染んでしまった様子の真琴。左のグラフィックには、真琴が読んでいるマンガのコマまで描かれている。ところで、原画の猫はどこに？

主人公のことを憎んでいる、という設定の女の子とは思えないくらい、やさしい眼差しの真琴。これがおそらく本当の素顔。

別れ、そして旅立ち

イタイ……。とてもイタイ。それが頭痛だと気付くまで、だいぶ時間がかかった。それに気付いてしまうと、こんどは様々なことが疑問に思えてきた。というよりも、わかっていることのほうが少ない。使い古したようなジージャンの裾を通っているのは自分の手。スカートから伸びているのは自分の足。目に映ったことしかわからない。あとはさっぱりだ。一番の問題は自分が誰かということ。それがわからないのはとても不安だった。ジンジンと指が痛んできた。今そのことにも気付いたのだが、とても寒いのだ。手元にあった毛布のような布をズルズルと引っ張って、それで肩から下を覆う。温かい。すると、ずるっと毛布の端が分裂して歩いていった。驚いていたら、それはネコだった。ぶるぶると全身を振ったあと、姿を消した。なぜだか気持ちよさそうで、同じように顔をぶるぶると振ってみる。気持ちよかった。

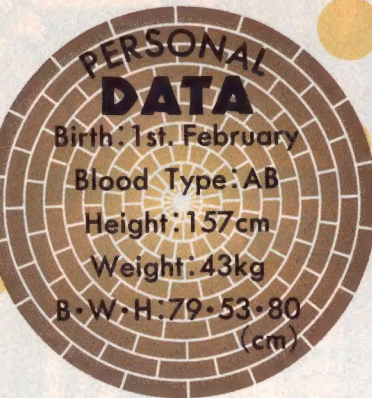
また、新しいことに気付く。まわりには自分と同じような人たちがたくさんいたのだ。でもみんな男の人で、しかもヒゲを何週間も剃っていないような人たちばかりだった。ヒゲの長さ序列なら、自分はここでは新米もいいところだった。急に居心地が悪くなり、体勢を変えると毛布の中で手が何かにあたった。ネコが居たところだ。あの子は何かを産み落としていったのだ。それは赤ちゃんに違いない。おじさんたちのイジメに耐えながらも、このネコの赤ちゃんとふたりきり、たくましくこの場所で生きていこう……。そう決心して両手で包みこんで拾い上げる。するとそれは……お財布だった。

みんなの視線をひしひしと感じながら中身を確かめてみる。お札が何枚か出てきた。ため息が同時に聞こえてきた。周囲をきょろきょろと見まわすと、みんな物欲しそうに指をくわえていた。

ネコの置きみやげは、1分でこの場所を卒業させてくれるものだったのだ。お世話になりました。みなさんのことは忘れません。立ち上がり、みんなの間を歩いてゆく。とりあえずの指標はもう決まっていた。それは……温かいご飯をお腹いっぱい食べることだ。

美坂 栞
Shiori Misaka

栞は、本来なら主人公が転入した学校に通っているハズの、ひとつ年下の女の子だ。というのも実は栞は、身体が病弱だという理由で、長期にわたって学校を休んでいたのである。ところが主人公と栞は、あゆの第２回食い逃げ事件の際に逃げ込んだ公園で、偶然出会うことに。病弱で休学してるのに、なぜ公園を出歩いていたのだろう。

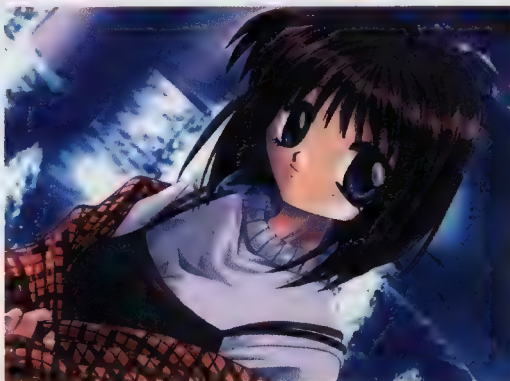
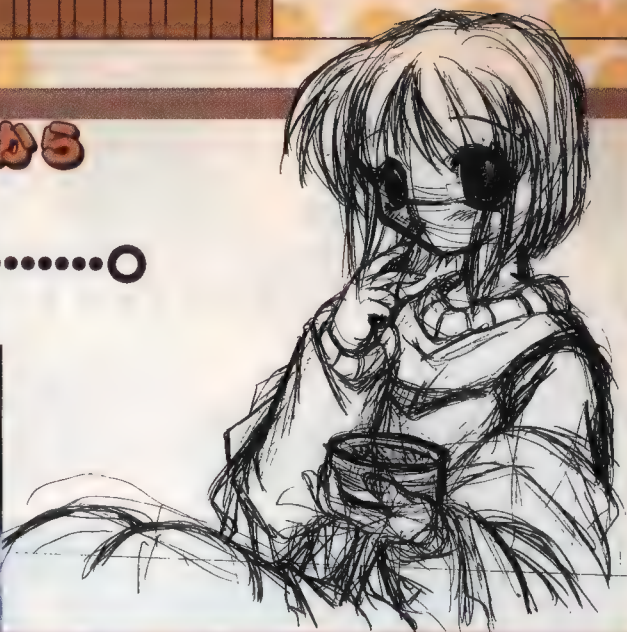
またそのとき、主人公は栞に声をかけてみたのだが、彼女はあまり返事をしないでいた。それは彼女が人見知りする性格だから、ということばかりではなさそうだぞ。そのとき栞の目の前で行なわれていた主人公とあゆのやりとり（ほぼ漫才）に、あ然としていたというのが本当のところらしい。

ちょっとワケありで、あまり人前に出ようとしない栞だけど、本当は、とても明るい性格の持ち主!?

PERSONAL DATA
Birth：1st. February
Blood Type：AB
Height：157cm
Weight：43kg
B・W・H：79・53・80 (cm)

病弱、という設定で考えられたストールは、すっかり栞のトレードマークといった感じだよね。彼女自身もこのストールは、お気に入りらしいぞ。ただ、あまり外出しないせいで、お気に入りといえるほどは使っていない。

べたん、と雪の上に座り込んでしまった栞。散乱しているお菓子が、ちゃんと原画から書き込まれているね。そのお菓子は、グラフィックではパッケージの絵柄まで、細かく描かれているぞ。

「…………」

病弱な娘のハズなのに、雪の上でアイスを食べて。そんなにお腹を冷やしたら、あとで本格的に調子が悪くなるかもしれないのにね。

薄着のようにも見えるけど、ちゃんとワンピースの下にセーターを着込んでいる。でもスカート丈は短い。

最初と最後の日に

真新しい服独特の香りと肌触りを感じながら、私はゆっくりと袖を通した。

「……少し大きいかも」、ピンと腕を伸ばしても、まだ裾が余っていた。でも、小さいよりはいいかなとも思う。きっとまだ背は伸びるし……。たぶん……。

「どう？　ちゃんと着られた？」

部屋の外からお姉ちゃんが呼んでいた。もう入ってきていいよと、声を返して部屋の中に招き入れる。

「思っていた以上に似合ってないわね」

私の制服姿を見て、表情をほころばせながらそんなことを言う。

「お姉ちゃん、ひどいよっ」

私とは違う色のリボンが揺れる制服に身を包んだ、ひとつ年上の姉。

今日、私は初めてお姉ちゃんと同じ制服に身を包んでいた。

「毎日少しずつ似合ってくるもん」

突っかかる私の頭にぽんぽんと手を置いて、「髪の毛伸ばしたら似合うかもしれないわよ」と、嬉しそうに笑った。

「お姉ちゃん……もしかして、冷やかしに来たの？」

「あたしはただ、姉として可愛い妹の記念すべき日を見守ってあげようと」

「こんなとき、普通は嘘でも似合ってるよとか言うものだと思う」

「あたしは、嘘はつかないことにしてるから」、まるで、子猫を相手にするように、私の頭を撫でながら……。

「……お姉ちゃん、嫌いっ」、ぷいっと横を向いて、大好きなお姉ちゃんの笑い声を遠くに聞きながら……。そして、たった今、目が覚めた自分に気づいた。

夢を見ていた……。懐かしくて、そして悲しい夢……。少し横になるだけのつもりが、いつの間にか眠ってしまっていた。時計を見ると、もう夕暮れが近かった。そろそろ行かないと……。

ベッドに沈む身体を起こして、ストールを羽織る。お気に入りと言えるほど着ることができなかったのが少し残念に思えた。簡単に服装を整えて、お財布を確認して部屋を出る。

「行って来ます……お姉ちゃん」

外に出るとそこはいつもの雪景色。

西日を浴びた雪の上に自分の足跡を刻み込む。それが、私にとって本当に大切な日になる最初の一歩だった……。

川澄 舞

Mai Kawasumi

PERSONAL DATA
Birth：29th. January
Blood Type：O
Height：167cm
Weight：49kg
B・W・H：89・58・86 (cm)

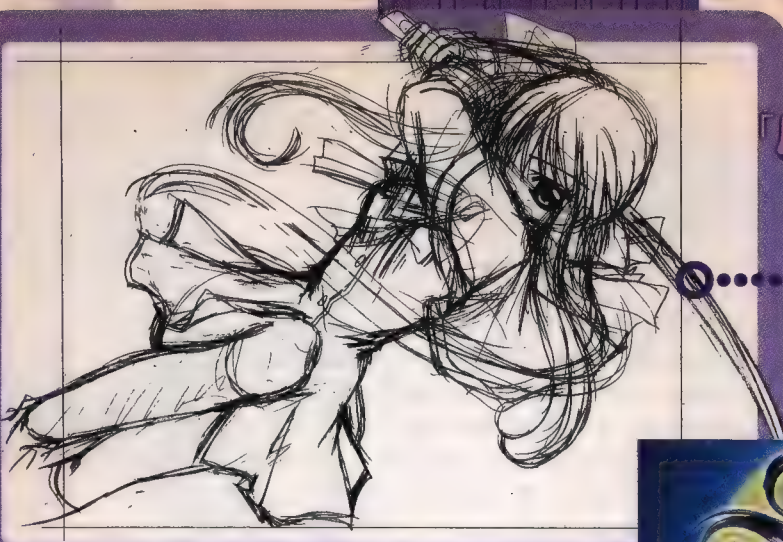
綺麗なドレスを身にまとった姿がよく似合う彼女。しかしどんな服を着てても、剣だけは手放すことはないらしい。

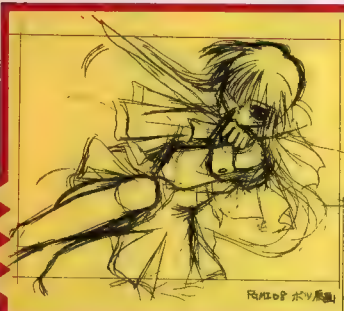
彼女の表情はいつも変わらない。通学の途中でも、学校の中でも笑顔を見せず、怒っているわけでもなく、悩んでいるわけでもない。ただ、何かを追っているかのような表情をしているだけだ。はたして、彼女の笑顔が見れる日はいつ？

主人公が通う学校では、夜の校舎をうろつきまわる人がいるのだという。その正体が彼女、川澄舞だ。なぜ彼女が夜の校舎を歩いているのかは不明だが、どうやら、目に見えない何かを追っているらしい。そしていつも脇に持っている剣。これはきっと、その謎を解く鍵となるだろう。謎めいた女の子の舞は、主人公よりも1学年上の3年生で、結んではいてもよく乱れる長いストレートヘアが美しくもあり、謎めいた雰囲気をよりいっそう引き立たせている。しかも彼女は無表情なので、なおさらというものだ。

主人公は笑うことを忘れたかのような舞に興味を持ち始め、いつか絶対に彼女を笑わせてみせようと思うが、それがかなう日は来るのだろうか。また彼女が持つ、独特な雰囲気の理由を知るときは来るのだろうか？

「…私は魔物を討つ者だから」

原画とグラフィックでは向きが左右逆なのはなんでだろうね？　それにしても、彼女が剣を構えたときの表情は、普段とくらべてさらに厳しく、険しい顔をしていますなぁ。

「月明かりを受け それは翻り…」

満月の明かりを背中に受けて、今にも何かを切ろうとするその姿。この躍動感あふれる舞の姿は、ただただ、美しい、という言葉しか出てこないね。

上のシーンの別パターンのボツ原画。この２枚も捨てがたい気がするけど、やっぱり上の絵のほうが動きがあるし、何よりも美しいよね。

「どんなテレビ見た？」

「ねぇ、昨日どんなテレビ見た？」

と聞けば、きっと彼女はこう答える。

「……見てない」と。

「最近、どんなCD聴いてる？」

と聞けば、きっと彼女はこう答える。

「……聴いてない」と。

そんな友達が私には居る。

どうしてそんな彼女と一緒に居ることを望んでしまったのか。きっかけはたくさんある。でもきっかけはあくまでもきっかけであって、その後は、やっぱり楽しく思えないと一緒に居続けるなんてことはない。そう、彼女と一緒に居ると楽しいのだ。彼女とふたりだと、いつも笑っていられる。気付くと、意味もなく笑っている。おかげではたから見ると、私はちょっとヘンな人かも知れない。でも彼女は無口だし、無表情だし、見た目はとてもとっつきにくい。なのにどうしてこんなに楽しいのだろう。よくよく考えてみると、とても不思議だった。

「おはよう、舞」

向こうから歩いてくる彼女を見つけ、私は朝の挨拶をする。彼女はそれに対して一文字に結んでいた口元をわずかに緩めてみせた。

「……おはよう、佐祐理」

私たちは登校する生徒たちにまぎれて歩き出す。そして私は聞いてみた。

「ねぇ、昨日どんなテレビ見た？」

「……置いてあるのは見たけど」

「最近、どんなCD聴いてる？」

「……CD？　CDってなに」

舞は私の想像よりも、さらに飛躍した返答を返した。それに対して私は、やはり笑ってしまっていたのだ。だけど、なんとなく謎が解けた気がした。

「でも……」と彼女は続ける。

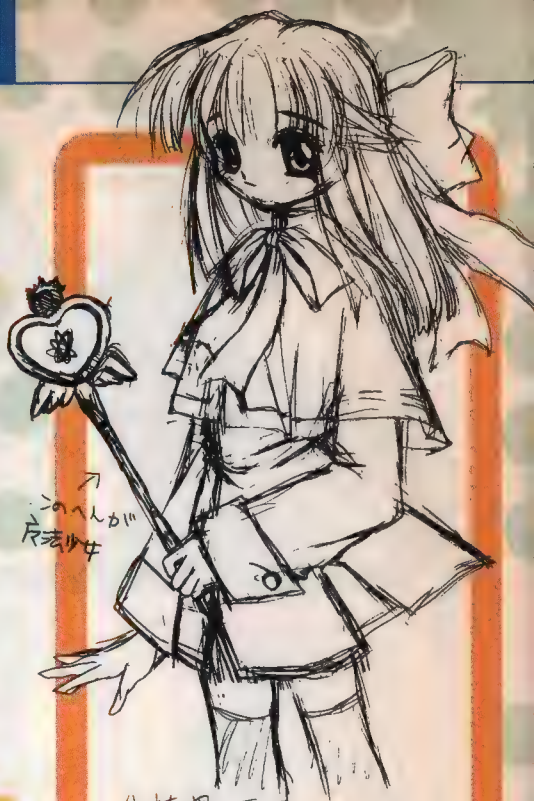
「もし……佐祐理が見て面白いと思ったテレビなら見てみたいし、CDも楽しいのなら、やってみたい……」

「うん、今度テレビも教えるし、CDも一緒にやろうね」

もうすぐ私たちの学園生活は終わってしまうけど、ずっと一緒に居続けられたらいいな、と思う。一緒に楽しいテレビ番組を見たり、CDをしたり。……でも、舞の思っているCDってどんなものなんだろう？

倉田佐祐理

川澄舞の親友で、舞や主人公と同じ学校に通う3年生。人見知りしない性格というか、人なつっこい性格をしていて、そのおかげで舞の友達として知り合った主人公とも簡単に打ち解けてしまった。舞と知り合ったのはこの学校に入ってからだが、それ以上の付き合いがあるのでは、と思わせるほど絆は深く、親友というよりも心からの友達という意味の〝心友〟といったところだろうか。チェックの幅広リボンと、いつも絶えない笑顔がチャームポイント。

ラフの段階では、魔法ステッキなんか書かれてしまって、本当に魔法少女かと思ってしまうほど。だけど、左のバストアップにある通り、ニッコリ笑った笑顔がかわいい彼女なのだ。

主人公と同じ学校に通う美汐だが、学年はひとつ下になる。なので普段は接する機会があまりないが、それでも主人公は彼女が誰かと一緒にいることが少ないのに気がつく。どうやら人をあまり寄せつけたくない性格のようで、何かのキッカケがあってそうなったのか、それとも幼いころからそうだったのかも主人公にはわからない。ある意味、謎に包まれた女の子といえるだろう。毛先が少しウェーブしているショートヘアと、ちょっと暗い感じの漂う顔が特徴(?)の女の子だ。

彼女の両手の仕草からも、どことなく暗い、控えめな感じのする美汐。しかしそれよりも、ラフの足元のところに書かれた〝ぷひー〟という言葉が気になる……。何かの暗号なのか？

美坂香里

Kaori Misaka

ウェーブのかかった長い髪の毛がポイントの美坂香里。名雪とは数年来の親友で、今では同じクラスメイトとして仲よくやっている。しかし、性格が名雪とはまったく正反対で、明るいというのは同じでも、積極的で、キビキビとした感じがある。だからどうして、名雪と長い付き合いができるのかがちょっと不思議なところ。もっとも、その積極的な性格のおかげで、主人公は彼女とすぐに打ち解けることができ、そして彼女のおかげで新しい学校やクラスにすぐに馴染むことができたのだ。

香里のラフを見てみると、顔立ちがちょっとキツめな感じがするよね。それはほかのキャラクターに比べて、目の感じが違うからかも。だけど、性格を表わしているみたいで結構イイね。

水瀬秋子

Akiko Minase

水瀬という名字が示す通り、名雪の母親で主人公がお世話になる家の家主。性格が非常におおらかで、のんびりしており、突然主人公がお世話になることが決まっても、人数が増えて、にぎやかになっていいという程度にしか考えていない。名雪があんな性格になったのも、この母親を見れば納得がいくかもしれないね。主人公にとっては叔母にあたり、かなりの年齢になっているはずなのだが、それを感じさせないくらい若々しく見えるのは、やっぱりそのおおらかな性格のおかげかな？

若く見えてもれっきとした名雪の母親。三つ編みをした長い髪を、肩から前の方へと流している感じがグッド。それと落ち着いた感じの漂う、地味目な服がいい雰囲気をかもしだしている。

"思い出に還る"物語の始まり

夢を見ている。

それは毎日見る終わりのない夢。

赤い雪。流れる夕焼け。そして赤く染まった世界。そんな夕焼けの空を覆うように、小さな子供が泣いていた。だが、どうすることもできずに、ただ泣いているのを見守ることしかできなかった。せめて……、流れる涙をぬぐいたかったのに。

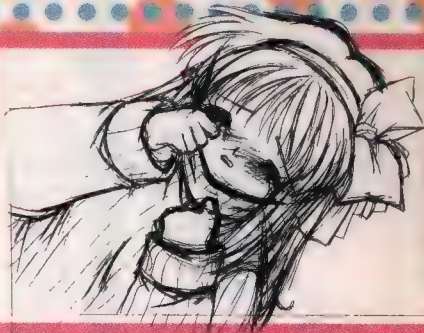
そして言葉にならない声。届かない声での約束……。

「約束、だよ」

といった感じで、断片的に投影される主人公の記憶。実はこの作品は、こういった主人公の記憶が物語の鍵となっているのだ。そして、このような表現と、ヒロインたちとの関わりで、〝思い出に還る〟というテーマを描こうとしているぞ。この記憶は、あるいは主人公が幼いころにこの街を訪れていたときのことなのかもしれない。

そして彼女たちは、やがて主人公に問いかけるだろう。

「私のこと、覚えてる？」

しかし、まだ物語は始まったばかり、いや、まだ入り口に着いたばかりなのだ。本当のドラマは、これから始まろうとしている。

そして、主人公が街にやってきたころはずっと降り続けていた雪が晴れて春が来るころ、冬の日の出来事もまた、思い出に還ってゆく……。

ねえ、私たちのこと……

…覚えてる？

音楽にも要注目だぞ

これまでは、シナリオやキャラにスポットライトを当てて、このゲームの雰囲気を伝えてきた。しかし、もうひとつ注目しなくてはならないポイントがある。それが、これから紹介する音楽なのだ。実はこの作品は、音楽にかなり力が入っている。それは、スタッフたちは音楽のことを、グラフィックやシナリオと同じくらい重要なものと考えているからだ。また、この作品に携わっているスタッフには、ゲーム音楽には定評のある、実力派のサウンドクリエイターが集まっているぞ。

しかし、残念ながら音楽は誌面では表現しづらいものである。なぜなら、音楽を聴いてどのように感じるか、ということは人それぞれ異なるであろうし、何より音楽は目に見えるものではないので、写真や文字などで表現することができないからね。

そこで今回は、本誌付録CD-ROM内に『Kanon』のデモのほかに、この作品で使用されている音楽を3曲収録している。曲はCD-DAで入っているので、普通の音楽CDと同じように聴くことができるぞ。音楽については、百聞は一聴にしかずで、とにかくキミの耳で確かめてみてね。音楽からも、ゲームの持っている雰囲気を、きっと感じ取ることができると思うよ。

また、この作品は音楽に力を入れているだけあって、初回限定版には、特典として音楽CDが付いてくるぞ。このCDは、お店で普通に売られているものと同等のクオリティーのものを目指して作られているんだ。そしてこの中には、『Kanon』のゲームで使われている曲の中から12曲が厳選されて入っているぞ。しかも、それらのすべては、アレンジが加えられたスペシャルバージョンなのだ。さらに、ボーカル曲の主題歌とエンディングテーマは、フルコーラスのバージョンになっている。こんなことからも、この作品の音に対するこだわりが見えてくるよね。

ちなみにこのCD、ジャケットにもひと工夫されている。なんと描き下ろしのオリジナルのイラストジャケットが3枚も入っているのだ。上のイラストは、そのうちの1枚の原画だぞ。

これが限定版に入っている音楽CDのジャケット(原画)

⬅3枚入っているジャケットの図柄は、いずれもゲーム中では使われなかったものばかり。これに色がつくとどんな感じになるのかな。

レコーディングは北海道で!

ゲームのメインイメージが雪の降る街ということで、主題歌とエンディングテーマは北海道のスタジオにて行なわれたのだ。やはりアーティストというのは、環境に左右されるような繊細な感性の持ち主であるということなのか!?

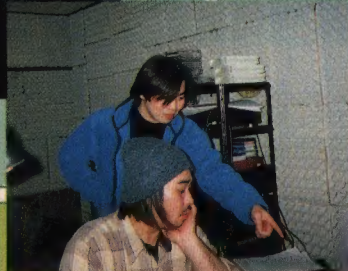
そして録音された日は、おあつらえ向きに空から雪が舞い降りる天気。これでより作品のイメージに近いレコーディングができたハズだね。

ちなみに音楽担当の折戸さんは、仕事がハードだったのと雪模様の天気のため、楽しみにしていたカニを食べられなかったらしいぞ。

⬆主題歌を歌っている彩菜さん。スタジオがとても乾燥していたらしく、ミネラルウォーターを摂りながら熱唱しているぞ。

⬅この人は、レコーディングと編曲を担当した高瀬一矢さん。タグを操る手にも緊張感が走る。

⬇熱っぽく指示を出しているのは、音楽担当の折戸さん。とても気合いが入っていたのだ。

Kanon

光と影の存在のように、どんなものにでも表があれば裏もある。面白いゲームが1本あれば、その反対側にはゲームを作るために苦労している人たちもいるのだ。ここではその開発スタッフの苦労(笑い)話をお届けしよう。

開発コードなのか？それとも愛称なのか？

キャラクターデザインの段階では、それぞれのキャラクターに確定した名前はまだつけられていない。そのために開発コードで各キャラクターが説明されるわけだが、今回は〝ふぁんたじぃちゃん〟、〝らぶちゃん〟、〝あすかちゃん〟などの開発コードが登場。どの開発コードが誰なのかはご想像にお任せするが、どちらかというと愛称に近いのではないだろうか？

焼きイモ開発室

この『Kanon』は、雪や白といった冬をイメージして作られている。だが開発室では、そのイメージがあらぬ方向へと走り出し、いつしか焼きイモがブームとなってしまった。しかし、焼きイモ屋さんはそれほど頻繁に訪れるわけではない。結果、スーパーやコンビニで売っているような既製品を買ってくることになるのだが、残念なことに開発室には電子レンジやコンロといった文明の利器すらない始末。仕方なく加湿器の中に焼きイモを突っ込むという暴挙に出たのである。おかげでブームが去った今も、加湿器を稼働させるたびに焼きイモの臭いが漂うようになってしまったのだ。合掌。

せっかくだから、佐祐理のボツ原画も1枚だけ見せちゃおう。

ヒロインのイメージが今とは違ったかも？

ヒロインたちが着用している制服は、初期段階では黒を基調にしたものだった。しかし、恋愛物であるこのゲームには色的にあまりそぐわないため、赤色に変更とあいなった。しかし、変更する前の名残として、靴下は未だに黒のままなのである。

カニカニ開発室

仕事中の息抜きのため、お菓子やお茶が配られることがある開発室。その差し入れの中でも、スタッフの心の中に今でも思い出として語り継がれるのがカニの差し入れ。しかもまるごと。どうしてスタッフがカニを差し入れたかは不明だが、開発スタッフ陣はまるでカニを恨んでいるかのごとく隅から隅まで食べ尽くし、残ったのはカニのキレイな抜け殻だけ。強者(？)揃いの開発スタッフ陣である。

鳥だ！　飛行機だ！月宮あゆだ！

あゆの背中にある羽は、原画担当がシナリオ担当に内緒で描いていた物だったが、いつの間にかそれがあゆのトレードマークとなってしまった。もちろんあゆも人間なので、彼女に羽が生えているのではなく、羽の飾りがついたリュックを背負っているだけなのだ。

使用される効果音はスタッフの手作り

ゲーム中いたるところで入る効果音は、そのほとんどがスタッフの手によって録音されたものなのだ。雪の上を歩く音は北海道の大雪原をスタッフが歩き、廊下を走る音はシナリオ担当が自分の家の廊下を走る。ときには不審に思われることもあったが、開発の苦労を思わせる話である。

ヤキニク開発室

この付録を作るため、E-LOGIN編集部の編集者と開発スタッフが打ち合わせをすることになった。しかも夕食を兼ねて焼き肉を食べるのだ!!　浮かれた留守番組の開発スタッフは、昼飯を抜き飢えたケモノと変化した。しかし待てど暮らせど連絡はなく、ようやくスタッフのところへ1本の電話が入った。「あ、さっき帰っちゃった」。もちろん焼き肉は今でもおあずけだ。

こんなポスターが……

店頭などで、『Kanon』のポスターを見たことがある、という人も多いだろう。実はこれは、ショップ用に作られたものだったのだ。今回は、全キャラ分を掲載しておくのでご鑑賞あれ。

Kanon カノン 水瀬 名雪
Nayuki Minase
水瀬名雪

月宮あゆ

沢渡真琴

美坂 栞

Kanon カノン 川澄 舞
Mai Kawasumi
川澄 舞

プレゼントするぞ!

これを見て、どうしても欲しくなってしまった、という人のために、全部セットで5名様にプレゼントしちゃうぞ。住所、氏名、年齢を書いて下のあて先まで。また、『Kanon』の記事への希望、イラストなども書いてあると嬉しいな。締切は4月30日です。

プレゼントのあて先は

〒151-8024 ㈱アスペクト
E-LOGIN編集部
「Kanonポスタープレゼント」係

E LOGIN 5月号特別付録
平成11年5月1日発行(毎月1日発行)　第5巻　第5号　通巻43号
Printed in Japan